

# 佛心

二〇二三年一二月号

浄土真宗 本願寺派

トロント仏教会



## 「和顔愛語」

今日、テレビをつければ戦争や略奪のニュースで、大勢の人のいのが奪われたことや、差別による迫害などが連日報道されています。

悲しみや虚しさだけでなく怒りや憎しみまでもが顕著にあらわれ、多くの人がなんとかしなければと努めています。

しかしその一方で、これらの問題は他の問題と複雑に関係し合い、解決方法を見つけないのもなかなか一筋縄ではいかないようです。このような中でよく耳にするのが、お互いの違いを理解し、受け止め、尊重し合うことの重要性です。

寺院の子ども会でもよく、「家族や友人だけでなく、知らなくても困っている人や動物・植物にも親切にして互いを敬いましょう」と伝えることが多々あります。

しかし、私たち大人は普段からそれらをどのように実行できているのでしょうか？私自身もこの口から綺麗な言葉を並べては子ども達に語りかけていますが、100%有言実行できているかと問われれば、その口をつぐんでしまいます。

このようなことを日本にいる友人僧侶と話したところ「尊重し合う」という漠然な伝え方ではなく、まずは「挨拶をする」などといった具体的なところから考えることが重要であると言われました。

ちなみになぜ「挨拶」が例にあがったかと言えば、挨拶という言葉

自体が仏教用語だったからです。

挨拶は「推しはかる」、拶は「切り込む」という意味があります。つまり挨拶には、師匠が仏道を歩む弟子に声をかけて、その返答をもって修行の度合いをはかるというニュアンスがあつたのです。

例えば、師匠がある修行を終えた弟子に「中庭はきれいに掃除できたか」と尋ねる。すると弟子は、とつさに（中庭は自分のところ）、（きれいに掃除できたか）このころの曇りは拭き取れたか」と解釈する。

そして師匠への返答として「今は綺麗ですが、明日には新しい葉が落ちるでしょう」と答える。つまりは、掃除に終わりが無いように、自分自身の修行にも終わりが無い、と伝えたのです。

とはいっても私たちの日常の挨拶は、大抵が「おはよう」「こんにちは」「さようなら」など一言です。それでも、その一言の声の大きさやトーンなどで相手に元気があるかいかぐらいは読み取れたりもしま

す。また仕事終わりに「今日もおつかれさん」と声をかけられるだけで、次の日も頑張ろうという気にもなれます。

たった一言であったとしても挨拶を通して人との繋がりを喜びとして感じとれるのであれば、それは「尊重し合いましよう」という理想概念をただ語りかけるよりも大事なこともかもしれません。

そして相手からの言葉や笑顔、特に挨拶を交わしたときの子どもの笑顔というものは、私たちの気持ちを大変嬉しくさせます。なぜならそこには挨拶を渡す側と渡される側とといった一方通行がないからです。つまり渡している方も相手から何かか渡されているのです。

仏教ではこの渡し渡されることを“布施(ふせ)”と言います。この“布施”はサンスクリット語で

「ダーナ(dāna)」と発音します。余談ですが、日本語の「旦那」は、このダーナが由来となっていて、このサンスクリット語の音写によつ

て、ダーナ、ダンナ、旦那“布施を渡す者”になったというわけです。ちなみに、英語の「寄付: Donation」や「臓器提供: Donor」の語源もこの「ダーナ: dāna」が語源であると言われています。

しかし多くの人たちは、このダーナつまりは「お布施」と聞くとお葬儀式や命日法要などで寺院や僧侶に支払われる金銭ことをイメージされるでしょう。しかし、そのお布施には大きく3つの区別があり、そのうちの一つをご紹介します。

その一つとは「無畏施(むいせ)」といえます。これは相手を畏(おそ)れさせて従わせることの無い施しのことです。

たとえば私が無表情のまま何の挨拶もなく皆さんを本堂へ招き入れたとすると、みなさんはきつと席について「先生に何かあったらどうか？」と心配したり「私が何か悪いことをいたかしら？」と不安になったりする。もしくは「なんだあの態度は！」と怒りを覚える人もいるかもしれません。

しかし、私が笑顔で皆さん一人ひとりに挨拶をして本堂に招き入れていたら、きつとそのような気分にはならないで

しよう。もしかすると嬉しい気持ちになつて参拝してくれるかもしれません。

この例えで何が言いたいかというと、「笑顔」や「挨拶」もお布施の一つである“無畏施”になるのです。無量寿経にはこのことを「和顔愛語(わげんあいご)」と記されています。和やかな顔と慈愛に満ちた言葉はお布施そのものだったのです。

和顔愛語は、決して笑顔で挨拶をすることだけに留まりません。例えば、1年前に日本からカナダへ向かうときのことでした。長時間のフライトも終わりに近づいたころ、ある席で赤ん坊が大声で泣きはじめました。

母親は子どもをあやし、なんとか泣き止ませようとしますが子どもの泣声はさらに大きくなっていききました。その母親は周りの乗客の疲れを察したのでしよう、何とも申し訳なさそうな顔をしていました。

飛行機が着陸し、ベルトの着用

ランプが消えたとき、周りの人たちが「自分の子どもが小さかった頃を思い出したよ」「子育て頑張ってたね」と、口々にその母親へ声をかけていました。

彼女はみんなから優しい声をもらってどれだけ嬉しかったでしょう。彼女の表情はみるみる和らいでいきました。それはまさに「和顔愛語」というお布施（ダーナ）の受け渡しですが、ハッキリと私の眼前に映し出された場面でした。

そして忘れてはならないのが、この私たちも阿弥陀如来より大切なおはたらきをすでに渡されていた（願われていた）ということ。それは仏さまのお名号であり、信心です。

お名号とは「必ず救う、我に任せよ」の南無阿弥陀仏（念仏）であり、阿弥陀如来の呼び声です。そして、「信心」というはすなわち本願力回向の信心なり（教行信証・信文類）、とあるように「信心」そのものも仏さまから本願より賜っていたものです。

私たちは、何を信じるか、何を信じ

ないかを選ぶ能力と、それを決定する自由があるのだと考えます。

しかし、そのような自分の心によつてつくりあげた信は、自分の身勝手な都合で変えることでき、また様々な場面によつて崩れるため、真の依（よ）り処（どころ）にはなりません。

また衆生である私たち一人ひとりが自らおこす信心であるならば、その人によつた能力や力量によつて信心の内容に違いも生じます。それによつて生まれいく浄土も異なってくるかもしれません。

しかし、いずれも阿弥陀如来よりいただいた信心であるからこそ、老若男女問わず、各々の信心に何の変わりもないのです。

そして、その受け賜った「信心」により私たちの口から「南無阿弥陀仏」のお名号がこぼれでて、誰一人としてひとりぼっちにはさせない阿弥陀如来の和やかな顔と慈愛に満ちたおはたらきに今日も出遇わせていただきます。

合掌 大内祐真

## 祥月法要（12月1月）

祥月法要とは、祥月命日（故人が往生された月のご命日）をご縁として仏法に遇い、阿弥陀如来の恩徳に報謝する思いでお勤めする法要です。

日時：12月3日（英語：午前11時から）（日本語：午後1時から）

日時：1月7日（日英合同：午前11時から）

場所：トロント仏教会/ZOOM



※子ども会は、10時15分より始まります。

ZOOMでの参拝を希望される方は、その旨を<tbc@tbc.on.ca>までお知らせください。

寺院事務所からzoom link を送らせていただきます。

故人が祥月でない方もご遠慮なくご参拝下さい。

じょうどうえ

## 成道会（12月）

成道とは、お釈迦さまがさとりを開かれたことをいいます。お釈迦さまは、29歳で出家され、それから6年間、苦行をされ、瞑想に入り、49日目の早朝、さとりを開かれました。それが12月8日に当たります。お釈迦さまは、人は、なぜ死んでいくのか、死んでいくのになぜ生まれてくるのか、この人生にどんな意義があるのか、という人生の苦悩の解決を求めて出家されました。私たちは、そのことを一生涯知らずにむなしく終わっていくかもしれません。そういった姿を悲しまれ、生死問題を既に解決して下さい、南無阿弥陀仏と喚んでくださる仏さまがおられると教えて下さったのが、お釈迦さまでした。お釈迦さまが成道されたおかげで、今私たちは、生死問題の答えであるお念仏に出遇えたのです。

日時：12月17日(日曜日) 午前11時から(英語)

場所：トロント仏教会、Zoom

どうぞご家族ご友人を誘ってご参拝ください。

